

都道府県名

石川県

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	加賀市立橋立中学校					
学 年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	1	1	2	1	5	14
生徒数	27	39	42	1	109	

研究の概要

1. 研究主題

基礎・基本の定着を図る指導法の工夫
——「確かな学力」の向上をめざして——

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

全学年・全教科を対象として取り組む。

（平成13年度より、数学科で全学年習熟度別少人数授業を実施して、基礎学力の定着について成果が得られた。そこで昨年度は、その成果から、枠を広げていくことが望ましいと考え、他の教科でもTTや少人数授業を取り入れるなどして、指導法の工夫の研究をした。今年度はさらに2年の理科、英語でも少人数授業を実施し、引き続き全教科で研究に取り組むため。）

(2) 年次ごとの計画

○テーマ

基礎・基本の定着を図り、生徒ひとり一人の学習意欲を高める

○仮説

各教科で指導法を工夫し、基礎・基本的な知識や技能をしっかりと身につけさせるなら、生徒の学習への意欲・関心は高まり、自ら学ぼうとする力がつき、学力の向上につながるであろう。

○研究内容・方法

- ・研究計画の作成（研究の方向の確認）
- ・校内研究会（授業研究と研究協議）
- ・校内研修会（各教科の実践の交流と点検・共通理解）
- ・先進校視察・フロンティアスクールとの交流

研究の重点

各教科で基礎・基本の定着を図る指導の工夫をする。

少人数指導やTTを核として、習熟度に応じたきめ細かな指導を工夫する。

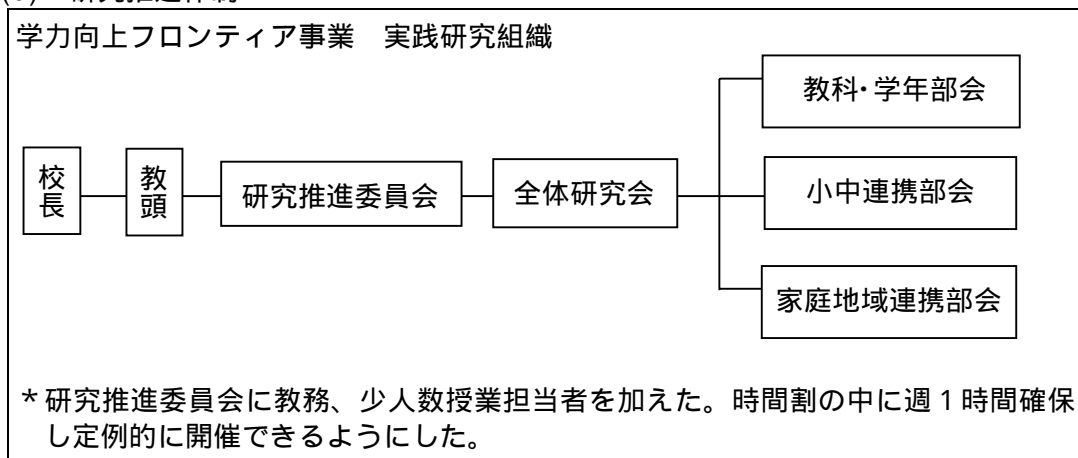
選択授業において、学び方や考え方を身につけさせるとともに、個に応じた基礎学力の補充をめざす。

個をばかしく、指導に結びつく準備を丁寧にする

平成 15 年度	<p>○テーマ</p> <p style="text-align: center;">基礎・基本の定着を図る指導法の工夫 ——「確かな学力」の向上をめざして——</p> <p>(「確かな学力」について共通理解を図り、授業改善及び指導法の工夫に力点を置いて研究を進めることにした。)</p> <p>○仮説</p> <p>各教科で基礎・基本的な知識や技能の定着を土台にして、思考力や表現力を伸ばす指導法を工夫し、個に応じた学習支援や評価を工夫するなら、生徒の学習意欲は高まり、「確かな学力」の向上に結びつくであろう。 (「確かな学力」を知識や技能の定着にとどめず、思考力や表現力などを含めた総合的な力として捉えることが必要と考え、その部分を加えた。)</p> <p>○研究内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実践の中間まとめと成果の普及 ・校内研究会(授業研究と研究協議) ・校内研修会(各教科の実践の交流と点検・共通理解) ・先進校視察・フロンティアスクールとの交流 ・家庭・地域への働きかけと小学校との連携 <p>研究の重点と具体的な取り組み</p> <p>わかる授業を実現めざす。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各教科で基礎・基本の定着を図るための指導法を工夫した。 ・日頃の授業で工夫していることをお互いに出し合っ、改善のポイントを探り、授業改善に努めた。 個に応じたきめ細かな指導を工夫する。 ・数学科において習熟度別少人数授業を実施した。 ・英語と理科で2年生を対象に少人数授業を実施した。 ・全教科で、一人一人の理解の程度や学び方に応じた指導を工夫した。 見きわめる力、表現する力まで含めた学力の向上を図る。 ・課題発見・課題解決能力をつけるために、 単元や授業の始めの課題提示を工夫し、生徒に課題意識をもたせるとともに、自ら課題解決の方法を探ろうとする態度の育成に努めた。 ・思考力・判断力・表現力を伸ばすために、 授業の中で、考える場面を設定し、考える問題を提示した。自分の考えをまとめて、「書く」「発表する」場面を設定した。 グループで話し合ったり、他の意見を聞いたり、考える場面を設定した。 ・「総合的な学習の時間」を通して、実践的な力をつけるよう心がけた。 学ぶ習慣を身につけさせる工夫をする。 ・家庭学習の習慣化を図るために、 生徒・保護者へ家庭学習についてのアンケート調査を実施した。 各教科で適切な宿題や家庭学習の課題を与える工夫をした。 学年の状況に応じて、家庭学習の習慣化を図るための取り組みを工夫した。 ・学び合いの場や学びの機会の充実を図るために、 朝の自習や放課後の補充学習を積極的に活用した。 学ぶ意欲の向上を図る。 ・主体的に学ぼうとする意欲や態度を育てる。 ・個人内評価や、意欲を引き出す評価を工夫した。 ・選択授業では、個に応じた基礎学力の補充や、発展的な学習を通して個性を伸ばし、意欲の向上を図った。
----------------	--

平成 16 年度	<p>○テーマ 基礎・基本の定着を図る指導・評価の工夫 ——「確かな学力」の向上をめざして——</p> <p>○仮説 各教科で基礎・基本的な知識や技能の定着を土台にして、思考力や表現力を伸ばす指導法を工夫し、個に応じた学習支援や評価を工夫するなら、生徒の学習意欲は高まり、「確かな学力」の向上に結びつくであろう。</p> <p>○研究内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実践の検証とまとめ ・校内研究会（授業研究と研究協議） ・校内研修会（各教科の実践の交流と点検・共通理解） ・研究発表会（公開授業と研究発表） ・家庭・地域への働きかけと小学校との連携 <p>研究の重点</p> <p>各教科における基礎・基本の定着を図る、指導・評価の工夫 数学の習熟度別少人数授業の効果をあげる工夫や、他教科でも少人数授業を取り入れてきめ細かな指導の工夫。 選択授業における、発展的内容の教材開発と個に応じた基礎学力の補充指導にいきる評価の工夫 基礎・基本をもとに、思考力 判断力 表現力を伸ばす指導の工夫 家庭・地域との連携で学習意欲の向上を図る ホームページを通して研究実践の普及を図る</p>
----------------	--

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

研究授業、校内研修会をもつことによって、研究主題に対する教職員の共通理解が深まり、「確かな学力」をつけるために指導法の工夫がされた。発問、板書、課題提示や授業展開、評価、教材、教具など様々な面で授業改善に努め、その実践をお互いに交流し共有することができた。何よりも基礎・基本を重視し、その定着の手だてを全教科で真剣にさぐる取り組みができた。

一昨年から続けている全学年の数学少人数授業に加え、今年度からは2年の英語、理科でも実施することによって、少人数授業の効果がいっそう現れてきている。生徒のアンケート結果では、「集中して勉強できるようになったか」の問いにはほとんどの生徒が「できる」と答えていた。また、「わからないところを質問しやすくなった」との声も多くきかれた。教師サイドからも「生徒のつまずきをつかみやすく支援しやすい」「生徒全員に発表の機会を与えやすい」などの声がきかれた。

基礎学力調査の結果から、基礎・基本の定着は5教科とも良いことが明らかになった。また校内の定期テストの結果からも、学習内容を概ね理解している生徒の割合が高くなってきている。課題を途中で投げ出さないで、わかるまで考える、できるまでやり遂げるといった粘り強い取り組みの姿勢が生徒の中についてきた。

数学の習熟度別クラス編成については、プレテストの結果から教師が行うだけでなく、生徒の希望で選ばせることも取り入れた。基本 応用 コースでの学習内容や学習の進め方を生徒自身が理解した上で、自分にとってどちらが合うのかを判断する力(コース選択力)がついてきた。

個に応じたきめ細かな指導を授業の中にどのように組み込んでいくかという視点にたち、学習指導案の形式を工夫し、指導と評価の一体化を図ることができた。

授業の場だけでなく、学活や生徒会活動や部活動などの場で、生徒に発表の機会を与え、自信をつけさせ表現力を伸ばすことができた。

定期テスト前の1週間は全校一斉に放課後学習を実施し、全教師が学級に入り学習の支援を行った。特に遅れている生徒への個別指導を重視し、学習意欲を喚起することができた。

選択授業では年間指導計画をもとにオリエンテーションを行い、ほぼ全員の生徒が希望通りの選択ができた。発展的な内容の選択では、生徒の興味・関心に合う魅力的な内容になり、思考力や表現力を伸ばすことができた。また補足的な内容の選択では、基礎・基本的な内容を教材や指導法を工夫しながら繰り返し学習させた。生徒からは「苦手だった分野がわかるようになった」との声が多くきかれた。

2. 今後の課題

数学の習熟度別クラス編成の仕方や授業展開をさらに工夫し、個に応じて「確かな学力」の向上に結びつけることが必要である。

英語と理科を組み合わせる少人数授業を拡充したが、異なる教科だと習熟度に合わせたクラス分けができない。来年度は選択授業で習熟度別の授業を実施することを検討していきたい。

研究のねらいに沿った授業設計をするために、学習指導案の形式を工夫していくことが必要である。特に評価の場面、方法を明示し、それに基づく個に応じた指導の手だてを入れていかねばならない。

どの教科でも、本校の生徒は応用問題や発展問題を解く力が弱い。基礎・基本を土台にしてさらに学力を伸ばす指導を工夫することが必要である。思考力や表現力をさらにつけるよう、あらゆる機会や場をとらえての指導が必要である。

各教科の年間指導計画の中で、評価計画や評価規準の見直しをすることが必要である。

家庭と学校が連携して、家庭学習の習慣化をはかる方策を探りたい。

研究推進体制の強化や、研究発表、成果の普及の方法を早急に探り、そのための準備体制を整えなければならない。

学力把握のための学校としての取組

- ・ 3年は県の基礎学力調査を実施し、その結果を分析する。
- ・ 各教科で基礎的な学力を診断する問題を作成し、年度当初に実施し、前年度と比較する。
- ・ 中間・期末テストは観点別問題を作成し、結果を分析する。また基礎問題と発展問題の区別をし、到達度をつかむ。
- ・ 個々の生徒の学力の推移や、学習の状況がつかめるように、個人表を作成する。

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- ・ 本年度の研究のまとめを冊子にして、管内の学校に配布する。
- ・ 校内研究会を校区の小学校及び郡市内の中学校に案内し、授業を公開する。
- ・ 保護者や地域の人たちに授業を公開し、フロンティアスクールの取組の状況や成果を知らせる。
- ・ 平成16年11月に研究発表会を開催する。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

- | | | | |
|----------------------|---------------------------|------------------------------|--------------------------------|
| 【新規校・継続校】 | 15年度からの新規校 | ・ 14年度からの継続校 | |
| 【学校規模】 | 3学級以下
7～9学級
13～15学級 | ・ 4～6学級
10～12学級
16学級以上 | |
| 【指導体制】 | ・ 少人数指導
その他 | T・Tによる指導 | |
| 【研究教科】 | ・ 国語
・ 外国語
・ 保健体育 | ・ 社会
・ 音楽
その他 | ・ 数学
・ 美術
・ 理科
・ 技術家庭 |
| 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 | | ・ 有 | 無 |